

## 天声人語

今年の春は楽しみが一つ増えた。そう思っていたただく方もあろうか、4月1日から夏目漱石の「吾輩は猫である」の連載が本紙で始まる。明治時代に雑誌「ホトトギス」に連載された文豪のデビュー作だ▼猫の吾輩は中学教師の苦沙弥先生に拾われる。明け暮れを眺めて猫は考える。「教師というものは実に楽なものだ。人間と生まれたら教師となるに限る。こんなに寝て居て勤まるものなら猫にでも出来ぬ事はない」。そうしたのどかな感想も、しかし今は昔である▼教師の多忙が、昨今しばしば報じられる。先日は、部活動の負担を減らす署名が先生の間広がっている記事を読んだ。経済協力開発機構（OECD）の3年前の調査によれば、日本の中学校の先生の勤務時間は、世界でも際だって長い▼反対に、指導への自信は際だって低かった。先生の本分は生徒と向き合うことのはずが、事務処理やあれやこれやで時間が足りないらしい。疲れ果てて笑顔を失った先生が増えていないか、心配になってくる▼季節柄、思うのは「春風の中に坐す」の言葉だ。中国故事に由来し、春のそよ風が万物を成長させるように、よき師のもとで育まれる幸せを言う。多忙を超えて「過忙」とも言うべき現代の学校に、春の風は優しく吹いているだろうか▼漱石先生と門弟は春に坐する間柄だったろう。「猫」の登場人物のモデルとされる寺田寅彦が一句残している。へ先生と話して居れば小春かな。教室の先生と生徒も、こうであってほしい。